
愚者と英雄のディヴァイディングライン

上原 兼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愚者と英雄のデイヴァイディングライン

【Nコード】

N6267X

【作者名】

上原 兼

【あらすじ】

果てない大海に浮かぶリヴァース大陸。その大陸の中央に位置するソルブルク女王国の学園国家区画ラヴァール。ここは大陸中から人材を集め、国家を担う人材を育成し各国に送り出す教育国家区画である。そこで生き残り立身出世を夢見て文武に励む若者達。そんな輝く若人達をしり目に、金策に奔走する生徒が一人。やる事なす事適当で、何故か人脈だけは優れている主人公フェイオン・セイト。

彼が現在何者で、過去に何者だったのか。そして彼が強者なのか弱

者なのか。

それは作中で知っていただければ幸いです。

結構がつつり書くつもりなので、サクサク読みたい人には向かない
と思います。

ヒロイン不在でどこまでいけるのか、やってみようキャンペーン中。

序章 『過去と愚者と』（前書き）

初めての投稿です。至らない点も多々あるかと思いますがよろしく
お願いいたします。

完全オリジナルですが、作品のジャンル上、他作品と類似する可能性もあると思われ
ます。その点をご了承の上、閲覧していただければ幸いです。

2011/10/15

序章 『過去と愚者と』

それは予期しない痛みだった。

時間の流れが緩やかに感じられる程に。

理性が痛覚を忘れたと思える程に、それは一瞬の出来事だった。

少年はただ、衝撃に身を躍らせながら斬撃の主の瞳だけを見ていた。幼い頃から片時も離れずに同じものを見てきたその瞳に揺らぎはなく、ただ自分の瞳を覗き込むように、その反応を刻み込む様に追っていく。

刹那に交わる視線。

そこには感情の揺らぎ。躊躇^{ためら}い。罪悪感の欠片と呼べるようなものは、およそ映していなかった。

理解できないまま少年の体は地に打ちつけられ、虚空を仰いだ。

降りしきる雨は容赦なく少年の体表に降り注ぐ。雨粒が視界を奪い、そして一、二秒の後に激痛が上腕部から全身を駆け巡った。

「あ……がっ！……あああああああ！！！！」

肩口から全身を駆け巡る激痛にただただ右腕の付け根を左手で押え、のたうちまわる事しかできない。目まぐるしく変わる視界の先には自身の右腕が無造作に転がっていた。

武人である少年にとって、止め処なく流れる泥水にまみれる血流も、脳髓をかき乱すようなその痛みも、初めての経験。

常に強者である彼にとって痛みは与えるものであれこそすれ、受けるものではなかったのだ。

「レリックを渡すんだ、成^{セイ}……」

成^{セイ}と呼ばれた少年の惨状を目の当たりにしながらも、おもむろに発した彼の声には何の感情も込められていない。

「あ……くっ……ッ！」

聞きなれたその声に幾分かの冷静さを取り戻す成。

体を無理やり引き起こし、出血と痛みを和らげる為に乱れた^{けい}勁を

整えようとするが、勁は勁絡を縦横無尽に駆け巡り、うまくいかない。

幼い頃から神童と呼ばれ、手足を扱うが如くコントロールしてきた勁が全く言う事を聞かなくなっていた。それを知ってか知らずか眼鏡をかけた少年は言葉を続けた。

「無理だよ成。君の勁穴の一つを右腕もろとも削ぎ落とした。もう今までのように力を扱うことはできない……。今はまだ残っている内勁が幾許かの猶予を残してくれているようだけど、それもじき潰える。君は死ぬんだ、間違いなくね……」

成にとつてもそれが事実であると言うことに異論はない。

この世界で人は勁によつて庇護されている。その庇護がなくなれば、致命傷を負う事で死に至るのは道理であるからだ。

だが成にとつてそんな事実よりも理解しがたい現実が眼前に存在している。そしてそれを問わずにはいられなかった。

「秦……どうして君が……」

「どうして？ あまり間の抜けた事を言わないでくれ成……ッ！」

そこで初めて、秦と呼ばれた少年の声に色がついた。

「僕は皇国七天軍の将校であり、君は裏切り者だ。僕にとつて皇国を裏切った人間は誅殺の対象であり、倒すべき敵……。立場が逆なら君も同じ答えにたどり着いたはずだよ。それが例え……」

「……………」

語りながら秦は一步一步と歩み寄ってくる。痛みで動く事もままならない成はそれを見ている事しかできない。

「それが例え、幼馴染だとしても……」

眼前まで到達した秦は、刀の先端を成の眉間に突き付け、言い聞かせるように言い放った。曇天が光を遮っている今、影に隠されたその表情は、見上げる格好の成には読み取れない。

違う。そんな言葉を聞きたかつたんじゃない。

成はそう思いながら、秦の言葉の全てを否定はできなかった。

何故なら自分自身、幼少時から同じ教育を受けて来たのだから。

皇国の兵士は皇帝を守る盾であり、剣である。

皇国に唾する者には牙を、皇国に仇名す者には刃を。

それがこの国の正義であり、それを遵守するその精神こそが忠誠であると幼いころから教えられてきた。

そして自分自身、国を守る為、家族を守るために強さだけを追い求めて過酷な修練に耐えてきた。

でもだからこそ耐えられない。秦の言葉は間違っではないが、成にとってどうしても許容できない言葉を含んでいた。

「僕は国を裏切っってなんかいない……僕が国に裏切られたんだ……ッ！」

「……………」
「信じてくれ秦羽！ 僕は楼閣ロウケンにッ！！」

伝えなければ。真実を伝えれば秦羽ならきつとわかってくれる。

そう思っていた。だが、

「黙れッ！！」

秦の怒声が言葉を遮り、その気が木々を揺らした様に錯覚させる。成にとつての希望はこの瞬間に、あっけなく、そして跡形もなく砕け散り、そしてこの瞬間に潰えたと言ってもいい。

「実の父を殺し、国宝まで奪い去っておきながら……。裏切られただつて？ ふざけないでくれ。何人も人間が返り血を浴びて宮殿を飛び出した君を見ているんだ。皇国の誰も……そんな世迷言信じやしないっ！！」

突き付けられた現実に言葉を失った。

成は自らの手で実の父を殺めた。どんな事情があつたにせよこれは事実であり、覆す事の出来ない現実であつた。

この事実がある限り、秦の言う通り、皇国に住まう誰もが自分の弁明をまともに聞くとはしないだろう。

それは自身がこの半日で嫌というほど思い知らされたはずだ。

それでも秦は自分の味方であると、味方でいてくれると思いたかつた。一生をかけて繫いだ絆は、そう簡単に絶ち切れはしないんだ

という理想にすぎた。

（僕は馬鹿だ……。この国に味方なんてもういるはずがないのに……ッ！）

結果それは成の甘えであり、願望にすぎなかったのだ。

成の父は皇国にとって重要な人物であり、偉大な人だった。

民を労り、皇国の守護者として長きに渡り国を守り、なおかつ皇帝の縁戚でもある彼は皇帝の良き相談相手であった。禁軍を率いて出征する彼を、民は神を崇めるような羨望の眼差しで送った。

生きてさえいれば、大將軍コウエン黄偃の名は皇国において最も偉大な將軍として後世の世に語り継がれていただろう。

父の名誉に泥を塗ったのは他ならぬ自分だ。

盲目的に国を守るだの、家族を守るだの、薄っぺらで幼稚な自身
自身の信念。この無知で恥知らずな自分の幼さが父を殺したのだ。

自責の念にかられ、成は自身を恥じずにはいられない。呆然とする成に対し、秦は再び言葉を紡ぐ。

「親を殺し、国を捨てて、君は何を為そうと言うんだ……」

秦のその言葉が成を現実に引き戻した。

（何を為す？ 僕のやるべき事……）

成はこの言葉を反芻し、父との思い出に思いを巡らす。幼い頃の記憶や、七天軍に入隊した時の記憶。そして父の末期の記憶……。

絶望しても、後悔しても、絶対にやり遂げなければならぬ事。

ある。確かにある。例えこの場で傷つき倒れようとも、果たさねばならない自分の責務。皮肉な事に秦の成に対するこの言葉が、成の朽ちかけた体に、欠片程の活力を与えてくれた。

雨は一層強くなり、抑える傷口から流した血は、地に落ちると一瞬で滲んで消えていった。秋も終わろうかというこの季節の雨は凍えるほどに冷たく、徐々に体温を奪っていく。

味方はいない。帰る場所もない。それでも譲れないモノがある。

それは末期に託された黄家最後の義務。

「もういいだろう？ 成……。レリックを渡すんだ。勁を失った今、治療しなければ君は確実に死ぬ。こんな場所で死ぬのが、君の望みなのかい？ レリックを渡せば助命を請う事も出来るかもしれない、そうすれば……ッ」

「レリックは……渡さない」

その言葉は反射的に吐いて出た言葉だった。

秦の言葉を遮り、左手のレリックを支えに成はゆっくりと立ち上がった。そして言葉を続ける。

「前にも、後ろにも、進めないって事はもうわかった……」

「ならもう諦めるんだ、成。逃げ道は何処にもない。あつたとしても僕が逃がしはしない。君の生きる道は、もう一つしか残されていないんだよ」

「生きる、道？ ……僕は、生き死にの話なんてしていないよ、秦」「何を……」

「これは僕の覚悟の話だ……。僕の……いや、僕と父上の意地の話だ」

そう呟くと左手で柄を握りしめ、口を使って鞘から刀身を抜く。

その動作に違和感など無く、まるで長年隻腕であったかのような無駄を感じさせない所作。

そう、レリックとは一振りの太刀である。

長さ二尺七寸。刃渡り二尺一寸。

柄にはこの世に存在しない獣の装飾と小さな宝玉。太刀緒は黄金色に輝き、雨曝しになっても色に陰りはない。対して鞘は簡素な造りで、所々錆ついてもいた。

リブアースに神話の時代から存在するとされる聖遺物の内の一振り。それが成の左手に構えられているレリックである。

太刀は片手で振るうようには出来ておらず、尚且つ成は太刀を扱った事がない。そしてその感触を確かめていられるような猶予も残されていない。しかし、ただそれだけの事だ。相手を倒す事も、そ

して自分が倒れる事すら思考の外に追いやっていい。

ただ為すべき事を為す。

まだ幼さの残る顔立ちの成だが、レリックを構え終えた時にはすでに武人の凄みを纏っていた。

勁力のほとんどを失った今、勝ち目は万に一つもない。

死なばもろとも、せめて約束だけは果たしてみせる。

その覚悟が瞳に意思として宿る。

「死ぬぞ、成……」

成の構えと覚悟を受けながらも、秦はまるで揺るがず、あくまで無機質な声を貫く。

「約束なんだ……これが僕にできる最後の忠孝。……だから……ッ！！」

成の言葉を受け止めた秦の瞳の色がかすかに揺らめいた様に感じたのは気のせいだろうか。降りしきる雨と、時折霞む視界では確証などもてるはずもない。

秦はただ目を閉じ、曇天の空を仰ぎ見、しばしの静寂の後に成を視界に捉え、惜別の言葉を口にした。

「そうか……残念だよ……」

刹那。

秦の体躯が爆ぜ、一瞬で成との距離を詰めてくると同時に、右手に持った刀による斬撃を繰り出す。

「ッ！？ くッ……！！」

それを何とか受け止めたものの、その衝撃によって成は大きくバランスを崩した。

内勁を使い肉体を強化した人間の膂力ばかりく岩をも砕く。

勁の恩恵をほとんど受けていない者にとって、それを無傷で受けきる事は不可能に近い。

なおも続く秦の斬撃、だが成はバランスを崩しながらもレリック

と刀の交差する角度を巧みに利用し、その力を受け流していた。

成の受けている斬撃は勁力を纏った人の剣筋である。

普通の人間であれば目で追うどころか何が起こっているかもわからないだろう。にもかかわらず防ぎきれている理由。

それは見えているからである。秦の動きそれ自体ではなく、秦の発する勁の流れと、刀に纏わせている勁の軌跡が。

勁には大別して肉体強化と生命力を司る内勁。

発運動を基本に、対象への作用を目的とする外勁が存在する。

この二つ、個人差はあるが修練によってある程度の昇華は可能である。これはもちろん費やした時と方策、個人の資質と言う制約付きだが、どんなに勁が弱くコントロールに難のある人間でも、努力と費やした時間だけ上達する。

だが、一方で個人の資質と言わざるを得ない分野も存在する。

それが勁を視る、勁を感じると言う分野である。

これはどれだけの修練を積もうと、時を重ねようと埋められない天賦の才であり、成が神童と謳われた由縁もこの力ありきの事。

そして今、秦の強撃を辛うじて防げているのもこの力の恩恵である。

「さすがだよ成！ 勁のほとんどを失っつていながらこれほど僕と打ち合えるなんてねッ！！」

「……はっ……」

打ち合えている訳ではない。合わせて受け流しているだけだ。確かに秦の打ち込みを防いでいるが、成に余裕などと言うモノは微塵もない。一挙手一投足に神経をすり減らし、受け流しきれない勁の残滓が、確実に体力を削っていつているのだ。

まさに死に体の状況である。

そしてその状況が成の防御に一瞬の隙を生ませた。

「終わりだ…… 成……」

「ッ！？」

渾身の一撃が来る。そう悟った時には既に遅かった。

とつさに剣筋を予期し、構えようとするが一分の反応の遅れ。体がこの局面で成の意思に呼応出来ない。

直後。

雨と風の音にだけ支配されていた深い森の中に、一際鈍い金属音が響き渡った。

「がッ！ くっ……ッ！」

成の左肩から噴きでる鮮血。

衣服に染み込み、肌に纏わりつくその血は、自らに体温に比例した温もりを残す。だが、未だ秦の刃は致命傷と呼べる所まで、命と呼べる所にまで届いていない。

左腕に全神経を集中させ、成はその隙で秦の瞳を覗き見た。

そして悟る。虚の太刀であると。

瞬間肩口をえぐる刃は、傷とレリックの上を滑り、足元深くへ。

(ッ！？ 死……ッ！)

下段からの逆袈裟。成の体は辛うじて反応し、間合いを外すために始動。だが、秦にとってその動作は織り込み済みであり、その対処は瞬時に行われた。

成の左足を自らの右足で踏みつけ、釘づけにする。

後手を踏んだ者の悪あがきとでも呼べるレリックによる防御反応も、既に無意味なものでしかなかった。

序章 『過去と愚者と』 (後書き)

序章で折れそうになりました。
用語の解説は作中で追々。

一章 『王国と学生と』 1・(1) (前書き)

設定的な部分を詰めすぎたかも知れませんが、
めんどくさかったら飛ばしてください。

連載が終わったらまとめて載せようと思います。

ソルブルク女王国。

リブアース大陸中央に位置するこの国は、西にベナユン山脈、東にエロール湖を有し、天然の要害と豊かな資源に囲まれた王政の大國である。エロール湖からの豊富な水資源、ベナユン山脈に眠る森林資源、鉱物資源。古くからその天然資源を背景に栄え、国土の三分の二を占めるロンダール平野の恩恵もあり農耕を主産業に発展を遂げてきた。近年は魔素エーテルの普及により工業化も進み、王都ラヴァイルを先駆けに農業と工業の転換期を迎えている。

また王都ラヴァイルには大陸一と言われる教育機関が存在し、リブアースにおける文武学問の聖地としても認知されている。

順調な発展を遂げているように思われるソルブルクであるが、実はそうでもない。この国はここ四年の内に二度の内戦を経験している。どちらも王位争奪を名目に起きたものだが、これにより主産業インフラ共に多大な損耗を受けており、現在も各国との調整を最優先に、交易や資本集中度の高い「内戦に脆弱な部門」の復興途上である。

事の発端は四年前。ソルブルク太陽暦一九七五年。

先々代の国王、ランスロト・レクス・ソルブルクの崩御を皮切りに起きた第一の内戦が全ての始まりであった。

これは継承権第二位のジェフリー皇太子が、継承権第一位で実兄でもあるフェリックス皇太子を暗殺した事に端を発した。

当時の大十字（軍事階級の最上位）アンドレアス・ランドルフ將軍率いる中央軍総司令部との密盟を取り付けていたジェフリー皇太子は、半日もかけず王都を内部から崩壊させ、半月の内に反抗勢力を一掃しソルブルクをその手中に収め、王位の篡奪に成功したのである。

そしてそこから始まったジェフリー王の中央集権的独裁体制。

内戦前より金によって癒着していた子飼いの官僚の地方への赴任。これにより中央、地方の行政は腐敗し、国内は一気に怨嗟えんさの聲で満ちる事になるのだが、それも三年で終わりを告げる。

現女王でありソルブルク王国第一皇女、ハルメリア・オブ・ソルブルク率いる反乱軍によってジェフリー政権が打倒されたためである。一年に渡ったこの内戦は隣国を巻き込み苛烈を極めたものの、最終的には反乱軍が王都を陥落せしめ終結する。

そして現在に至るわけだが、ここに至るまでに払われた犠牲は多大なものであり、それは人命、生産資源、国防資源を筆頭に数え上げればきりが無い程である。二度の内戦による戦死者は十数万にのぼるとされ、幾万もの尊い命が失われた。

しかしこの悲劇を乗り越え国が復興に向かっていることは確かである。数年のうちに過去の負債を清算することは可能であるとの試算もはじき出されるなど、展望は明るい。それは単に新女王ひとえの手腕であることは疑いないだろう。

ただ、近年ソルブルクには別の問題が生じている。

政情不安は解消されつつあるものの、長く続いた政治不信により国王の王都での権限が著しく低下した事である。

そしてその四年の間に王都での影響力を増した組織がある。

それが王都の三番区画に位置し、他区画の三倍の規模を誇る学園国家区画ラヴァイル。通称学園である。

2

「いるんだろう？ フェイオン・サイト」

決して大きくはない、それでいて凜とした声が辺りに響き渡った。
。ここは学園の中央に位置する商業区画。

昼時には多くの学生で賑わう飲食スペースだが現在一五時二〇分

を少し過ぎた辺りであろうか、人気もまばらな時間帯である。にも拘らずここに大きな人だかりが出来ていた。

その中心には対峙する二つの影。

一人は長い銀髪を後ろで束ね、凜とした眉を釣り上げ、さも不機嫌そうに仁王立ちする美少女。腰には刀剣らしきものが掛っており、この年代の少女には似つかわしくないものの、何故かそれすらも彼女自身と調和しているように錯覚させる程の存在感を放っていた。美少女と言うにはいささか男らしさが見え隠れしているような気もするが、それもある意味少女の美しさを引き立てているように見えなくもない。

少女は周りを探るような素振りも見せず、中心で自身と対峙する老け顔の青年を睨みつけていた。すると。

「ういゝ……、ちよつと道開けてくれや」

野次馬衆の中からよきつと一本の腕が伸びたかと思うと、それが人混みを掻き分けながら進んでくる。

途中で「いてっ！」とか「おいコロン！ 何処、搦んでんだお前わっ！？」とか、「フェイちゃん、前見えね……」とか、「タスケはどこ行きやがった……」とか、「ここでーす！」とか、によきつと腕が生えた五〇メートル先ぐらいから聞こえてきたりしていた。そしてようやく。

「お、抜けた」

と、現れたその男。

頭髪は黒髪で頭はぼさぼさ。その質の悪そうな髪の毛を無理やり後ろに流している為か、所々ハネまくっている。

そして何より特徴的なのはそのやる気のなさそうな目である。

一見、切れ長で東国人特有の様式美を持っている様な目ではあるが、疲れからなのか、それとも精神的なものであるのかは分からないが、淀んでいた。ひどく淀んでいた。

少女はようやく視線を老け顔の青年から外すと、人混みを掻き分け出てきた男フェイオンを見て口を開く。

「相変わらずと言うか、いつにもまして目が死んでいるな」

「おいおい。この目は労働を極めし者が持つと言う聖なる目だぞ？」

「何が聖なる目だ……。そんな淀んだ瞳、魚類以外で見た事ないわ」

「お前、それは魚類と俺に失礼だろ……。てあれ？ あいつら」

意味不明な会話の中途、何かに気づいたのかフェイオンはあたりを見回す。すると地面にうつぶせで突っ伏す小さな女の子が一人。

「おいこら起きろ小動物。そんな所で寝たら腹壊すぞ」

女の子の前まで歩いて行ったフェイオンは見下ろし、女の子の頭頂部にある結び目を鷲掴みにしてぞんざいに言い放った。

するとその声に反応したのか女の子は顔をあげて「……った」

「あん？」

良く聞こえなかったのかフェイオンが聞き返すとよりはつきりとした声で。

「可弱い私が掴んでいた腕を振りはらって置いてったな……」

「そりやお前が変なところ掴むから」

「変なところってどこだよっ！？ 具体的に言っつてよっ！？」

がばっ、と顔をあげて謎の抗議をする少女。その顔は怒りからか悲しみからなのかはわからないが紅潮していた。

「お前は俺に何を言わせたいんだっ！？ 馬鹿なのか？ お前は

脳まで小型サイズなのか？」

当然と言えば当然の反応を見せるフェイオン。

全く悪びれないフェイオンに抗議の意思を示す為なのか、少女はまたしても突っ伏し、そしてわなわたと震えだした。

「……おい」

傍から見れば泣いたんじゃないか、と思われる状況だがフェイオンはそうは思っていないようで、逆に不気味なものを見るような不信感丸出しの声色で話しかけている。すると、

「くっくっく……」

少女の口から不気味な声。全然泣いていなかった。

と言うより悪い顔をしていた。

「どうした小動物ー。とうとうおかしくなったのか？ 言っとくけど、医者にかかる金はねえぞー」

「フェイちゃんはどうかやら大事な事を忘れてるようだね……？」

フェイオンのひどい物言いを物ともせず、少女は殊更悪い笑顔で呟く。

「何だよ……」

嫌な予感。

「今日の夕食当番は誰なのかな？」

フェイオンはそれを聞いて一瞬固まり、

「ッ！？ そ、そそそ、それがどうしたってんだ……」

と、明らかに動揺した表情を浮かべ、小者臭全開で震えだした。

「今日の私は夕食当番……。つまりフェイちゃんの命は私が握っているも同然。せいぜい気をつけるがいいんだぜ……」

「お前、何するつもり！？ 俺の飯に何を盛るつもり！？」

「盛るところか、むしろそれ自体を食卓に並べてやる……」

「隠せよ！！ せめて殺意隠していこうよ……」

当事者以外が完全に置いていかれる身内ワールド全開の話だが、当人達は至って真面目に、と言うよりむしろこれが本題と言わんばかりの茶番を繰り広げている。毒物が並ぶ食卓とはどういうモノなのだろうと、銀髪の少女は一瞬考え、すぐに考えるのをやめた。

そんな中、かなりの時間放置された男が一人。

この輪の主役の一人であるはずの老け顔の男が、しびれを切らして止めにかかる。

「お……ッ！」

だが、

「いやあ、やっと出られましたよー。もうちょっとで勁が暴発するところでしたあー。師匠！ 僕また一つ成長しましたっ！」

「あ……のう……」

新たな登場人物によりあえなく失敗。

短髪直毛でつんつん頭、目がくりつとした少年が爽やかな笑顔と

ともに現れた。少年は何か嬉しい事があつたようで、嬉々としてフエイオンに話しかけている。ところが当のフエイオンから反応が返ってこないため、少年は改めて、

「あれ？ どうしたんですか師匠……」

と声をかけた。

「いやあ、コロンの奴がさあ、いつもの奴でぐずってんだよ……。タスケあれ持つてねえか？」

タスケと呼ばれた少年はフエイオンとふてくされた少女を交互に見やると、一瞬で状況を理解したようで、

「任せてください師匠……！」

と、声をあげ何やら懐をぐそぐそと探っている。そしてしばらく探った後に出てきた物、それは何の変哲もないチョコバー。タスケはその包み紙をきれいに取り去ると少女の口に近付けた。

「コロンちゃん、これをば……」

「はむっ……！」

近づけた途端、アロワナのスピードでチョコバーを丸呑みにするコロン。それはまさに餌付けされたペットそのものであり、その顔は満足したのかほくほくで、テカテカしていた。

それを見て安堵したのかフエイオンは一人大きな溜息をつく。

「毎度の事ながらこの不毛な時間を返してくれ……」

そう独り言を呟くが、隣にいるタスケは笑いながら、

「いや、でも師匠がコロンちゃんをちゃんと見てないから」

「五十メートルも目を離してたお前に言われたかねえ」

「ですよねえ」

タスケはばつの悪そうな笑顔をげんなりとしたフエイオンに向けて、頭を掻く仕草を見せた。何故か全て終わったかのような達成感を感じている雰囲気の人三人だったが、そこに我慢の限界に達していた老け顔の男が忍び寄る。

「無視すんなやこらああああ……！」

「どわッ!？」

散々待たされた老け顔の男の意を決した怒声が響き渡った。

腹から声を絞り出したためか膝に手を置き肩で息をしている。

「私もそろそろ始めたいんだが」

少しだけ同情したのか、仁王立ちで静観していた銀髪の少女もやれやれと言った面持ちで同調した。

「そ、そうだな……」

すっかり忘れていたと言う事をごまかしつつ、フェイオンは対峙する二人の間に足早に歩み寄る。

そしてゴホンと軽くせき込むと、この場所にやって来た当初の目的を果たすため、畏まった口調で話し始めた。

学国のシステムが大きく変革したのは、他国から人材の流入に拍車がかかって後の事である。

戦乱が終わりを告げ、十大国の時代が続いて久しく、大陸が束の間の平和を享受していたこの時代。

各国は比較的平和なこの時代に他国よりも軍事的、技術的優位に立つべく人材育成に力を入れていた。そこで白羽の矢が立ったのが旧王立ラヴァールアカデミーである。

名称にも名残があるように、元は百年程前にソルブルク王が次代を担う軍事的エリートを育成するために設立したものが旧王立ラヴァールアカデミーの前身であるが、これを当時の国家予算相当で買い請けたのが現理事長の家系に連なる豪商のレラーズ一族であった。何故この施設に目を付けたのか詳細は不明だが、レラーズ一族はある目的の為にこの施設を買い請け、その際に築いたソルブルク王との太いパイプを利用し、国内外の様々な事業に関わっていく傍ら、施設の従来の教育機関としての性格を長い年月を掛けて改変していった。

しかし、この改変の過程には大小様々な問題が山積しており、何

もかもが順調に推移していった訳ではない。

その中でもとりわけ立地の問題は致命的であった。

ソルブルクの王都に居を構えるアカデミーにとって、ソルブルクから受ける干渉を懸念せざるを得ない事や、教育機関と言う性質上、逆に各国の軍事力が勞せずソルブルク国内に進駐出来てしまう可能性がある事などがそれに当たった。各国の貴重な人材を預かっている以上、安全保障の問題は切っても切り離せず、一つの命題としてレラーズ一族の前に立ちはだかつたのである。

加えてアカデミー創設以来、ソルブルクは他国への侵攻も他国からの明確な侵略も受けていなかったが、もしそのような事態に陥った場合、最も懸念される戦時下におけるアカデミー内への干渉を防ぐ手立てがなく、この現状を打破しない限り、一族は目的の達成が不可能に近いと考えた。

依然、西国一帯では紛争や国境での小競り合いが絶えず、ソルブルクとていつ対岸から飛び火してもおかしくない情勢だったのである。結果、各国からの人材の流入が滞り始め、ただ手をこまねいていられない状況に陥った一族は、これを解決する為に力技に打って出る。

その豊富な資金力と技術力を背景に各国との折衝、ソルブルクとの交渉を重ね、アカデミーをいかなる他国の干渉をも受けつけない特別指定区域にするべく動き出したのである。

二〇年に渡る地道な交渉は紆余曲折を経るが、レラーズ一族はアカデミーを対象としたリブアース初の国際条約の締結にこぎつける事に成功した。

それがソルブルク太陽歴一九五五年に締結され、施行された学園国家区画不干渉条約と、同年に成立した学園国家主権法である。

これはこの条約文言の一部を借り受ければ、

《いかなる国又は国の集団も、理由のいかなを問わず、直接又は間接に学園国家内の学内問題又は対外問題に干渉する権利を有しない。したがって、学園の人格又はその政治的、経済的及び教育的要

素に対する武力干渉その他すべての形態の介入又は威嚇の試みは、
当条約に反する。》

という物である。これはもちろん、学国から他国に向けても適用
されるものとされる。

また、同年施行の主権法には各国憲法を元に作成された規範も含
まれておりこれを事実上の憲法と定め、旧王立ラヴァールアカデ
ミーはその名を学園国家区画ラヴァールと改めると共に、各国代
表、学園理事の連名をもって学園国家の建国を宣言した。

「えー……。判定官フェイオン・セイトの名において戦技ストラグ
ルの開始を宣言。チャレンジ」

「レニー・ケンプだ」

老け顔の男がそう名前を宣し。

「アセプト」

次いでフェイオンが銀髪の少女に向かって言う。

「ハリエット・フォスター……」

銀髪の少女はそう名乗った。

戦技ストラグル。

これは学国の法に則^{する}った決闘であり、学国における社会的弱者を
救済する為に考えられたシステムである。

この場合の弱者と言うのは学園内の序列を指すと共に、金銭的、
つまり経済的弱者の意味合いも含まれる。

学園国家を宣して以来、学内の全ての運営、つまりおよそ国を構
成する為に必要とされる組織の運営は学生によって行われている。
五万人を超える学生の一人一人がこの学国の国民であり、自らの学
費、及び最低限必要とされる生活費を組織に所属する事で賄ってい
る。

「承認。おいそこらの野次馬、さがれさがれ。怪我すんぞ」

フェイオンはめんどくさそうに、野次馬の輪を下がらせる。輪だった人ばかりは、ばらけながら何故かほぼ全員がハリエツトの後方に引かされた。

これは言っておくが、フェイオンの誘導によるものではない。

「こらこら！ 何でそっちに集まるんだてめえらっ!？」

「文句言っんじやないよ。お前そりや、どっちが危険かって言ったらお前のいる方が百倍ぐらい危ないのは猿でもわかるってえもんだろ」

ハリエツト・フォスターは強い。これは五万人を有する学園に置いて、知らぬ者はいないとは言わないが、概ねで常識である。

学園には戦技能ランクと言う物が存在する。

これは半年に一度行われる適正試験の一部を元に判定されるものであり、詳細に言えば勁力学、紋章学、実践武術科目の総合点を数値化し、格付けしたものである。

このランクは戦闘技能に特化した技術を総合的に判断するもので、高い者ほど戦闘に特化しているとする一種の指標である。

しかしあくまでこれは指標であって、実戦における優劣を表すものではない。

そして戦技ストラゲルとは、このランクによって得られるポイントを奪う目的で発動する行為であり、このポイントは個人、あるいは個人が所属する組織に予算の名目で振り分けられる。戦技能ランク以外の点数または戦技能ランクを含めた総合点もちろん順位付けされ、ポイントとして加算されるが、戦技ストラゲルに適用されるのは戦技能ランクのみであり、このランクはその為に存在すると言っても過言ではないのだ。

「こいつのランク知ってるか？」

フェイオンはハリエツトを指さしそう尋ねると。

「知らないで挑む訳ねえだろ……。ランクでは負けてるかも知れねえが実戦は別だ。俺にも勝機はある」

レニーはよほど自信があるのか、既に目をぎらつかせ、体が勁を

含めて戦闘態勢に入っているようである。

それを聞いて視線をハリエツトに向けて。

「だってよ？」

「構わない。もう慣れた……。時間を取られるのは億劫だが、私にとっては都合がいい」

「以外だな、金に困ってるようには見えねえが」

ランクやこれまでフェイオンが判定官として見て来た戦闘を鑑みれば、学国入学以前から余程高等な教育を受けて来ただろう事は容易に想像できていた。どこぞの王族貴族が珍しくない学国内において、ハリエツトもその類だろうと思っていたが違うのだろうか。そう考えている内にハリエツトが口を開く。

「私は……いや、お喋りはここまでにしよう」

何かを言いかけて語る必要がない事に気付いたのか、ハリエツトは視線を目の前の対戦相手に向け直した。

そして静かに深呼吸し、相手を威嚇するような意味や他意を含まない、明らかな気遣いを込めてこう口にした。

「安心していい。……すぐに終わる」

ちょうどその頃、一人の青年がハリエツトの後ろに陣取る野次馬の団に気付いた所だった。頭髪は綺麗な栗色で、柔和な造りの整った目鼻だちをもった学者肌の好青年である。

「あれかな？ またやってるのか」

少しの苦笑いを浮かべて、青年は掛けていた眼鏡の位置を修正した後、本を片手にその一団に向かって歩き出した。

「（ハティは僕に見られるのを嫌うからなあ。たまたま通りかかったって事にしておこうか）」

そんな事を考えながら、その輪に加わった彼は、低くはない身長を活かして最後列から尋ね人を探した。輪の中心にいる事はわかっ

ていたため、存外すぐに尋ね人を発見する事が出来た。

「（怪我だけはしないようにね……）」

青年は優しい視線をその輪の中心にいる銀髪の少女に向けてそ
う呟いた。

彼女にばれないように、彼はその場から彼女を応援する事にした。

一章 『王国と学生と』 1・(1) (後書き)

主人公達が出て来た場面は、はしやぎすぎたと反省しています。そして我ながら意味不明だと思います。

一章 『王国と学生と』 1・(2) (前書き)

主人公は?と問われると。現段階ではわかりませんと答えます。

ハリエツトは静かに腰から刀剣を引き抜き、自らの胸の前まで掲げると、左手をその刀剣に添えた。

DRレリック・フルンティング。レリックを模して造られたこの世界の主力兵器であり、これはハリエツトの為に造られたオーダーメイドの逸品である。

「……、」

更に添えられた左手には紋章術を宿す者の証である幾何学的文様が見てとれ、構えを取って間もなく、それは一つの現象として顕現を始めた。左手に浮かび上がる紋章から溢れ出す冷気がそれである。薄い白銀色の冷気が辺りに立ち込め始め、大気中の水分が急激な温度変化と圧力によって相転移を始めた。

フェイオンは比較的ハリエツトに近い位置にいる為にその冷気を殊更に感じる事になり、それに対して身震いを禁じ得ない。

コロんとタスケに至ってはその寒気に耐えられないのか、フェイオンにしがみついて暖を取っている始末である。

寒いんなら離れてるよ、と言いたくもあるが、今動くのは危険であると判断し放置。

放射状に拡散していた冷気が逆流するかのようフルンティングの周りで収束を始め、空気中の水分が急激に昇華して凍結していく。その性質上、既にハリエツトの足元は凍りつき始めていた。

「なるほど、これが噂の氷紋か……。おもしろい」

レニーに動じる気配はなく、不敵な笑みを浮かべている。

一向に動こうとしないハリエツトを観察しているようだが、どうやら彼は戦闘に関して慎重を期するタイプのようなのだ。

敵の動きを観察し相手の力量を図り、何が適切で何が必要かをデータとして蓄積して戦術に組み込むタイプ。

発言からもつと直情的なタイプかと思っていたフェイオンにとっ

て、それはいささか意外だったが、そう言えばハリエツトに挑ん来る程の男だったな、とすぐに得心する。

そしてすぐに次の段階に移行するだろう事を予期する。

初期戦術の確認を含めた観察の次の段階。それは情報収集である。

「それじゃあ見せてもらおうか、戦技能ランク上位の実力って奴を」
その予期通りにレニーは動いた。

呟くと腕を交差し、一気にそれを解く。するとその指先にはいくつもの短剣が握りこまれていた。その刃先は鈍く輝いており、勁によつて強化されているのが見てとれる。

「へえ……」

それを見て素直にフェイオンは感心した。

対称に勁を作用させ、それを維持する事を威勁と言ひ、これは外勁の中でも特に難しいとされる高等技術である。

更にレニーはそれを複数本同時にやつてのけている。飛ばした後も勁を維持できると言うのなら、もうそれだけでかなりの外勁の使い手であると言う事が伺い知れる。

内勁に比べて外勁は派生技術が極端に多いが、一流と呼べるレベルの使い手が少ないのは単にその難度によるものだ。

威勁一つをとつてもその難度は顕著で、発露した勁を別の発運動によつて別のベクトルで扱ふ事を威勁と言ふが、その難度は桶に水を張り、力を加えて流れを作つた流水の中に絵具を投じて、滲ませない様な物だと度々例えられる程である。

正確に言えば滲ませる事も技術の一つに数えられるが、それはあえてする程の価値もない技術とされている。

さらに威勁から派生する技術も多岐にわたり、戦闘技術として見た場合、内勁、外勁、紋章術はその優劣こそ付けがたいが、希少性や汎用性を鑑みれば外勁が一步抜きんでていると言えるだろう。

ただこの学国はさすがに各国の優秀な人材を集めているだけであつて、外勁の使い手も多数存在する。

レニーもその内の一人と言つわけだ。

「（あの武器……。勁に、とりわけ外勁に特化した隠業師か。て言うかここ、暗殺者まで養成してんのかい）」
そうフェイオンは一人心中で呟いた。

「……………」
思慮を終えると同時に、準備を終えたレニーが始動。短剣に勁を
行き渡らせた後、言葉なく唐突に地を蹴り宙へと舞い上がった。

数メートルの跳躍の後、間隙なく両手に握りこまれた短剣を投擲する。その一連の動きはあまりにも滑らかで、ぞっとするような機微を抱かせた。

勁によって強化されコントロールされている短剣は、その軌道を無造作に変化させながらハリエツトに迫るが、眼前に迫りくる凶器に際してもハリエツトは全く動かない。

だが、フェイオンにはわかっていた。動けないので動かないのでもない、動く必要がないのだと言う事を。

次の瞬間、彼女の真意を余所に短剣は容赦なくハリエツトの五体に降り注ぎ、刺し貫いた。かに見えたが、受けた傷によってよろめくどころか、舞い散るであろう血飛沫の一滴さえこぼれてはいない。周りの野次馬達は一体何が起こったのかわからずにざわついているが、フェイオンにはその理由が分かっている為驚きはない。

全て彼女の防御反応によるものだ。

その事象自体を説明するのは簡単な言葉で済む。

降り注いだ短剣の全てが、寸での所で止められていた。彼女の造り出した小さな氷塊によってである。

外勁を得意とする者が防御手段として使用する障勁と言うものが威勁には存在するが、これは発した勁を体外で維持固定した後、圧縮して硬化する事で防御手段に転ずるモノである。

彼女の行ったそれは、障勁に対してある紋章術の特性を付与し応用したものだ。付与したものは強度と範囲。それを可能にしたのが彼女の右手に握られているフルンティングである。

レニーはそれを見て、さらに短剣を取り出し同じように投擲する

が、ことごとくハリエットの絶対防御の前に撃ち落とされていく。

「おいおい……、それはちよつとずるくないか？」

言葉とは裏腹にレニーは何故か笑っている。

気付いたのだろうか、並の勁力ではハリエットの防御を突破できない事に。それにしても自重気味と言うよりも、心底嬉しそうな笑みであるのだが。

そして、フエイオンが訝しむ間に一気に戦局が動き出す。

「……ハッ！！」

投擲による攻撃を諦めたレニーの着地を狙ってハリエットが動いた。フルンテイングを一閃すると、大蛇のようなうねりをあげて巨大な氷柱が奔る。

「……ッ!？」

油断していた訳ではないだろうが、虚を突かれたレニーは一瞬戸惑いの表情を浮かべるもすぐに対処を施した。

迫りくる氷柱を威勢で造り上げた足場を使い寸前かわす。大袈裟にかわしたのは氷柱に触れるのが危険と判断したからだろう。

さすがに感じが良い。触れれば瞬時に凍傷に侵され、手足を失いかねない。

だが、ハリエットの攻めはそこで終わらない。

避けられる事を想定していたかの様に矢となってレニーに襲いかかる。瞬時に目標を捉えたハリエットは、渾身の一撃を打ち込むべくフルンテイングを振りかざした。

「ち……ッ！！」

振り降ろされたフルンテイング。態勢を崩して死に体のレニーは、それを瞬時に引きだした刀剣で何とか受け止めた。

だがその瞬間。

轟！！ と言う音と共に、剣と剣の交錯する点を中心にして冷気が放射状に波及する。

「……ッ、」

「……ッ！！」

表情を崩さないハリエツトとは対象的に、レニーの表情は歪んでいた。勁で冷気のある程度は防げているだろうが、中心点の温度は絶対零度に近い白魔の世界である。恐らく体表のいたる部分が凍傷に近い症状に見舞われているはずだ。

すでにその状態になって1分程が経過しているが、そう長くは持たないだろう。判定官であるフェイオンは、ほぼ勝敗は決したと判断し止めに入るべきか入らざるべきかの思案にはいる。

ところが、

「……つた……」

「……？」

「参った。降参だ……」

レニーからの余りにも唐突な敗北宣言。

瞬間ハリエツトの創り出した白魔の世界は、その昇華と共に幾万もの氷晶へと姿を変え、降り注ぐ陽光を浴びて幻想的な世界へと転じた。いわゆるダイヤモンドダストである。

そして交えた剣戟から脱力してフルンティングを引くと、そのままレニーを見降ろした。

「自信がある様だったが、存外あっさりと引くんだな」

圧倒する気ではいたが、ハリエツトにとっては若干拍子抜の感が否めない。少なくともレニーの目は危地にありながらまだ死んでいなかったからだ。余裕があったとも言える。

心が折れる時はまず目が折れる。これは幾人もと対峙してきたハリエツトなりの哲学である。

「命あつての物種さ。自信があると見せかけていれば手を抜いてくれるんじゃないかと期待したが、あんたが容赦ないもんでね」

「……すまない。手心は騎士にとって無礼に当たると教えられて来たのでな」

本心が否か判別しづらいレニーの表情と言葉に対して、いたって率直に言葉を返すハリエツト。そういう返事が返ってくるとは予想してなかったのだろうか、レニーは少しだけ驚いた表情の後に苦笑いを浮かべた。

「まいったね……。皮肉も通じないんじゃないや完敗以外の何物でもねえや」

先程とは打って変わって、今度の言葉はハリエツトにも本心だとわかる。

それを見て少しだけおかしくなった。隠す必要のない心は隠そうとしない、その姿勢が少し意外だったからだ。

ハリエツトの口から洩れた小さな笑い声に対して怪訝な表情を浮かべるレニー。

「いや、すまない。見た目によらず道化を演じるのが上手いと思っ
てな」

微笑んだハリエツトに対して、何故か少しだけ頬を染めるレニーだったが、すぐにかぶりを振って呟いた。

「……うまいんじゃないかって、道化を演じるのが仕事なんだよ。まあいいさ、目的は果たしたしな。ほんと、こき使ってくれるぜあの女……」

「目的？」

最後の方は小さくてよく聞き取れなかったが、その言葉は聞き逃さなかった。何かをほのめかすような口ぶりがハリエツトを更に当惑させる。やはり彼は何か別の意図を持ってこの戦いに臨んでいたようだ。これが最初に感じた疑問の答えなのだろうかと尚も追求しようとするが、

「なあに、こっちの話さ……。別に隠すつもりもないが、すぐにわかる事だ」

それだけ話すとレニーはすくつと立ち上がり、その場を後にするべく身を翻す。

そして数歩進んで徐に立ち止まり、ハリエツトにとって無視でき

ない言葉を口にした。

「またな。アルベール家のお嬢様……」

「…ッ!？」

その言葉を聞いた瞬間に、記憶の奥底に仕舞っていたはずの記憶が奔流となつて脳内を駆け巡つた。

過去の自分と過去の自分を襲つた忌まわしい記憶が瞬時に甦る。

その光景は記憶とは呼べない程に鮮明で色の付いた確かな物。

それもそのはずだ、その記憶はたかだか数ヶ月前に遡つただけのモノなのだから。

景色に溶けるように去っていくレニーから、ハリエットは目を離せないでいた。

アルベール家。その言葉がハリエットの思考を停止させる。

立ち尽くす以外の行為を許さない程に。

3

学国内にいくつが存在する各国の生徒に割り当てられた個別講堂。その内の一つ東周皇国講堂は、皇国生徒と一部の学国関係者にのみ入室を許可された個別講堂であり、いわゆる学国の特別指定区域である。

その構内は講堂とは思えない程の豪華な装飾と、深紅を基調とした緻密な造りの周絨毯が敷き詰められており、学国内の他の施設とは異なる東国文化を色濃く映した様相を呈している。

その中で、ある人物の到着を待ち、緊張から来る落ち着きのなさを隠しきれない生徒が一人いた。名を喬伯キョウハクと言い、学国内で五期を過ごしたいいわゆる上次生である。

講義が行われている時間と言う事もあり、ここに今いるのは彼を含めて数名であるが、彼の落ち着きのない足音だけがひたすらに聞

こえてくる。

「少し落ち着いたらどうだ？」

「落ち着いてなんかいられるかっ！ 今からここにいらっしやるのは皇国七天の董彩貴殿だぞ！？ ああ…、何でこんな大役を僕が仰せつからなければならんのだ……。もつと適任の者がいるだろうに……。そもそも上の連中は何をしてるんだ？ 出世したいなら名を売るチャンスだろう！ こんな時に揃いも揃ってレポート提出だの、必須科目の履修だのと逃げ口上ばかり並べおって……。！」

「上の人らにとっては、名を売る機会よりもこのまま何事もなく修了する事の方が大事なんだろうさ」

「全くもって度し難い！ 何という愚かしさだ！ 上に立つ者の心構えがその程度のものであつて良いのか！？ 否ッ！ 断じて否ッ！ ！」

見るに見かねた学生が声をかけるも、出てくる言葉は己の不運を嘆く消極的な言葉と上に対する恨み辛みばかり、学生は周りの者と視線を交わし、何を言っても無駄のようだと耳に栓をして肩をすくめる。

学国には様々な国の若者が集まるが、必要以上に関わる事は暗黙の了解として禁じられている。それは単純に修了すれば殆どの者が帰国し、祖国の為に力を振るう事になるからに他ならない。つまり他国との戦事に至つた場合、情や内通の温床となつてしまふ可能性を無視できないと言う事だ。

それは平時においても同様で、軍事機密や専門技術等の流出を防ぐ為には必要な措置であるとされている。

その為、学国では団体で取り組むカリキュラムの全てを国籍ごとに分けられたクラスによつて行う事になっている。振り分けは基本的に4～50人を基本とし、成績順によつて区分される。

必要に迫られて長く行われてきた方法であるが、当然弊害も生まれる。それが学国内における派閥の形成である。

箱庭の中に意見の異なる分派が多数存在すれば、考え方の異なる

者同士が反発しあうのは当然の事。尚且つ学国には他国の者と関わり合いにならないという不文律がある。国籍によって派閥が生まれるのは道理と言えるだろう。そしてこの東周皇国講堂も派閥に与えられた施設である。

そしてこの講堂の主が翼燦皇都会。学国における皇国出身者による派閥であり、喬伯はその派閥の中堅どころ。

派閥においての序列は厳しく、幹部の言葉には絶対服従が義務付けられており、そうした体質が今回の喬伯の不運の原因とも言える。「それにしても遅い……。いや、このまま来てくれない方が僕としては助かるんだが……」

門口付近でうろつろと歩き回る喬伯を見て、周りの学生達も少し緊張に見舞われてきた。そうならない様に喬伯を落ち着かせようと試みたのだろうが、失敗した今となっては後の祭りである。

殊更緊張感に包まれる構内だったが、程無くして門口をノックする音が広い講堂に響き渡った。

「ど、どうぞっ!」

緊張と驚きで反射的に発した声は甲高くうわずってしまった。

それに応じてゆっくりと、そして静かに扉が開き、ようやく現れた来賓の姿を目の当たりにし喬伯は息を呑んだ。

現れたのは全身を黒の皇国将校官服で固めた女性。

膝下まで届こうかというコートのような羽織を翻し、構内に足を踏み入れた。喬伯はその女性将校をまじまじと見つめ、その意外な美しさに溜息を漏らす。恐らく見た目からは誰も彼女を皇国で十指に数えられる武人とは予想できないだろう。そう思えるほど彼女の肢体は均整がとれており、若さと美貌に溢れていた。

意識してなどいないであろうが、妖艶とも言えるその表情に時を忘れて吞まれてしまう喬伯。それは周りも同様のようだった。

「さすがにちよっとむず痒いんだけど……。そんなに女性将校が珍しいかな?」

「…ッ!? し、失礼しましたあッ!」

彩貴の言葉で我に返り、慌てて謝罪してしまう喬伯。

そんな彼を見て彼女は、クスッと微笑んだ。

見た目とは裏腹の可憐な声と笑顔を向けられた喬伯の鼓動は波打つばかりで一向に収まる気配がない。このままでは緊張でどうにかなってしまうんじゃないかと本気で不安を覚える始末だ。

「案内役は貴方？」

笑顔を絶やさぬまま、間を置かずに彩貴は次いでそう口にした。

その言葉に喬伯はびくり肩を揺らす。

「は、はいっ！」

と慌てて答えたが、頭の中では上の連中の不在をどう伝えるべきかで一杯だった。軍の幹部を迎えると言う時に、皇都会の幹部が不在であるなどと言う事は無礼以外の何物でもない。

内心、何で私が連中の尻拭いを、とも思ったがそうも言っていない。学国内の生徒の悪評が自国に伝わる事で得をする者など何処にもいないのだから。

責めを負う覚悟で伝えるしかない、意を決して口にした。

「も、申し訳ありません。上の者は、どうしても、そのう……は、

外せない用事があるようでした……」

「ええ、それは良いのよ。私がそうしてもらおうよう頼んだから」

「は？ と、申しますと……？」

ところが、彩貴から返って来た言葉は意外なもので、間の抜けた声と共に思わず喬伯は聞き返してしまった。すると少し考えた後に彩貴は、

「内緒」

と、先程の笑みとはまた違った悪戯っぽい微笑を浮かべた。

殊更に可憐な口調で言われた事で喬伯は口ごもり、それ以上追及する気力を根こそぎ削がれてしまう。機密と言うことだろうか。

上の者が自分に押し付けた事に意味があつたと知れて少しだけ怒りが収まったが、未だ緊張からは解放されない。

「それじゃあ、さっそくで悪いんだけど……帝庁に案内してくれる

名前を聞いた彩貴はほんの一瞬だけ考え込み。

「じゃあ……、伯つて呼んでいいよね？」

と口にした。

「…はっ…！」

喬伯は口角を吊りあげ、今度は迷いなく快諾したが、直後にとてもない羞恥心が彼を襲った。自分が案外俗物的な人間であった事に気付かされ、それを簡単に受け入れてしまった自分がいたからだ。そんな自分の滑稽さに、心の中で苦笑せざるを得なかったが、最早そんな事はどうでもいいと思える程、心の容量を遥かに超えた緊張によって体が疲れきっていた。

この務めを最後まで無事に終える事が出来るだろうかとそちらの方が不安で仕方ない。重たい体を引きずるように、構堂を後にしようとする彩貴の後ろ姿を見て喬伯は溜息を吐いた。

一章 『王国と学生と』 1・(2) (後書き)

レニー・ケンプをモブキャラから昇格させる。がんばれレニー・ケ
ンプ

一章 『王国と学生と』 1・(3) (前書き)

会話文の練習がしたい。それを本編でやってしまおう。

ちよつと時間がないので、この場面は添削と追加で書いていこうと思います。

この場面必要かって？ 必要です……たぶん。

戦技ストラグルの判定を終えた後、フェイオン、コロン、タスケの三人は商業施設を抜けて講義棟付近を歩いていった。

商業施設の周りには講義を行うための講義棟が立ち並び、それを北東に抜けると闘技場や軍事教練などを行うための演習場。北に抜けると学国の運営を一手に取り仕切る庁舎群、いわゆる政庁エリア。北西に抜けると各個別講堂を含めた居住エリアが存在している。

政庁エリアにはほぼ全ての庁舎が存在しているが、管轄によって、特に学国内の防衛や治安維持を目的とした組織などはその職務を遂行するに適した場所を拠点としている。

学国は所在が王都の区画を間借りしているような状態の為、入口から未広がりには敷地が広がっているのが特徴的で、施設を増築増設していく過程の中で王都の外周を大きく超えて敷地が広がっていた。その為、正門を頂点に歪な三角形をしていてその底辺は未だに広がり続けているのが現状である。

この三人が現在歩いているのは正門に程近い講義棟付近である。政庁エリアに向かう北門方面を目指して歩みを進めていた。

フェイオンは頭に手を組んでだらしなく。コロンは無駄に楽しそうに。タスケは『人体の不思議。勁理学編』といかにもな本を読みながら歩いている。

すると二号棟の入り口に差し掛かったところで、タスケが何か思い出したように顔をあげて、二人に話しかけた。

「そう言えば、師匠とコロンちゃんはこれからどうするんです？」

「ん〜？ 俺は報告兼ねて帝庁に顔出してくらあ」

「あたしはユイちゃんが飼ってるってゆー、アントニオイノシシを見物に行ってくるー」

フェイオンはともかくコロンの予定に違和感を覚える二人。

「なにその猪……。カリスマ性にも秀でてんの？」

「首回りが赤い毛におおわれた、元気があれば何でもできるイノシシらしいぜー」

「なんか、いろんな意味で危なそうですね」

「何故か知らんが……。その名前に惹かれる俺がいるのは確かだ」

二人は謎の生物に興味津々だったが、それ以上にそんな生物を飼っていると言うユイちゃんの正体の方に興味が湧いた。

「食べられるかなあ」

「やめとけ……」

食欲の権化であり、じゅるりと舌を鳴らすコロンの暴挙を未然に防ごうとしたが、もし実行に移しても他人のフリを全力ですると誓うフェイオン。

「僕はこれから動力学の特別講義があるので、これで失礼しますね」
タスケはそう言うと本をパタンと畳んだ。

「特別講義？ そんなもんあつたっけか」

「ええ。と言つても動医学の講義なんですけどね。そんなに興味はないんですけど、カルディナさんが受けるってしつこくて……」

「あの色情魔か。大変だな……力になるつもりは全くないが、頑張れよ」

「いや、嘘でもいいからそこは力になると言つてください」

優しい目をして、堂々の傍観者宣言をされたタスケはうなだれながらツツコんだ。

「冗談だよ、冗談」

「ほんとかなあ……」

「ほれ、もう行け。遅れんぞ？」

タスケのじと目に耐えられなくなったフェイオンの苦し紛れの指摘で気づき、懐から時計を取り出すタスケ。

「あ、ほんとだ！ それじゃあ！！」

「おう、頑張れよー」

そう言つて手を振りながら駆けていくタスケを見送った。

そんな様子を見ていたコロンが呟く。

「タスケは勉強熱心だねー」

「この場合、その褒め言葉は当てはまらないと思うんだが」

無理やり受けさせられているのを知っているフェイオンはそう返す。「でも、頑張っても全然上達しないのにっぴい頑張ってるよ？

挫けちゃったりしないのかな……」

「いいんじゃないのー。あいつの勁下手は末期だが、諦めて何もしない奴よりは好感が持てらあ。努力を笑う奴も、努力をしない奴もそれは冷めてんじゃないけど無気力つつうんだよ」

「……良くわかんないけど、フェイちゃんに言われたくねーよってみんな言うと思う」

「うっせえっ！ 俺のは病気なの！ もう修練で何とかできるレベルじゃねーのっ……！」

溜息をついて、やれやれ と言うジエスチャーをするコロソ。ことう言っ所ばかり上手くなっていくのは保護者である自分の近くにいたせいだと思えなくもないが、

「てめえ……。だいたい、お前だって軍学以外サボってばっかじゃねーか！」

「あたしは戦術師志望だもん。人生の中で賭けるべき生き甲斐を見つけて、それだけに心血を注いでいるのだよ。わかるかな？ わからないかな？ わからないだろうな……フェイちゃんの頭じゃ」

「はっはっはっ。何を言ってるのかなこの小動物は。お前のようなちんちくりんはせいぜい軍のマスコットどまりだろう」

「あたしまだ十二だもん！ これからもっと伸びるもん……！」

頬を膨らませてフェイオンに特攻するコロソだったが、いち早く頭頂部の結び目をフェイオンに掴まれて手が出ない。

「ふはははは、現実を見る犬ころめ。呪うなら己の遺伝子を恨むがいい！」

完全に悪い大人の見本と化したフェイオンは、高らかに声をあげて魔王の如き邪悪な瞳でコロソをおちよくるが、

「とっつっ！」

「のうツ!？」

手は出なかったが足は出た。

「悪は滅びる」

「お前……正義の味方にしては攻撃がエグすぎんぞ……」

股間を押えてうづくまるフェイオンと、勝ち誇るコロソ。

周りで見ていた学生たちがクスクスと笑っている。それに気付いたフェイオンは、あはは、と渴いた笑い声を発して、コロソを抱えて一目散にその場から逃走したのは言うまでもない。

結局、北門付近までコロソを抱えて走るはめになったフェイオンは、大量の汗を噴き出しながら、ぜえぜえと荒い息で膝に手をついた。文句の一つも言いたかったが、先程の二の舞を演じそうなので断念。呼吸を整える。

この先の北門を通ると政庁エリアに辿りつくが、コロソは友達と遊ぶと言うのだから居住エリアに行くのだろう。北門からは居住エリアに行けない為、ここで別れようと声をかけるが、そんなフェイオンを無視して怪訝な表情でコロソは話しかけてきた。

「そう言えばハリー元気なかったね？」

ハリーとはコロソがハリエツトを呼ぶ時の愛称である。ハリエツトだから普通はハティだろ、と思うが別段支障がないため放置している。

「そうか？ あいつはいつもあんなもんだろ」

先程の戦技ストラグルの後、確かに言われてみればハリエツトは少しおかしかったようにも思える。勝敗が決した後レニーと何やら話していたようだがそれが原因だろうか。しかし、それは取り立てて自分が心配するような事でもないだろうとも思える。幾度となく判定官として彼女の戦闘を捌いてきたが、いつも先程の様な取つき難い感じで寡黙かつ冷静沈着な少女であるし、何より顔見知りではあるが、ハリエツトの心情を解するほど親しい間柄でもなかった。

コロンは自分より幾分親しいようだが、それを自分に言われても困る。

「フェイちゃんに女の子の事を聞いたあたしが馬鹿だったよ……」

「ほっとけ！ どっちにしるロイドがいるんだから大丈夫だろ。あいつちやつかり後ろの方で見物してたし、俺らが口出すこつちやねーよ」

十二の子供に女云々を語られたくねえ、とフェイオンは言いたいのを我慢した。

ロイドとはハリエットの恋人である。本人達には直接聞いた訳ではないが、おそらく間違いないだろう。学内でもハリエットの傍には戦技ストラグルの時以外、彼がいつも傍にいるからだ。そしてハリエットがロイドといる時の表情を見ていけば大体察しが付く。何と云うか、単純に言えばロイドといる時のハリエットは表情も仕草も武人と言うには程遠い。普通の少女とは言わないが、フェイオンが見ている限りそれは心を許している証だと思えるのだ。

フェイオンの言葉にコロンは少し考え込んで口を開く。

「うん……。そうだねっ！！ ロイドの方がフェイちゃんの百倍頼りになるもんねっ！！」

「……、お前大人は傷つかないとか思ってたんだろ」

人として格下と言われたようで、げんなりするしかない。

「じゃあ、あたし行ってくるね！ ちゃんと仕事終わらせるよー！！」

納得がいったのか、フェイオンを失意のどん底に陥れた元凶は、無邪気な笑顔で走りだす。

「おー、行け行け。さっさと行け。すぐに行け」

疲れ切ったフェイオンは、聞こえても聞こえなくても良いぐらいの声で投げやりにコロンを見送った。

「……あいつの相手をしてもらえない秘訣、誰か教えてくんねえかな……」

そして若干本気の愚痴をこぼした後、フェイオンは自らの目的地

に向かってたらと歩き出した。

一章 『王国と学生と』 1・3 (後書き)

話数が増えてきたら、いずれ統合して減らそうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6267x/>

愚者と英雄のディヴァイディングライン

2011年10月24日02時03分発行